

物語のアラベスク part 6

高 柴 慎 治

物語のアラベスク part 6

高 柴 慎 治

現在、「物語のアラベスク」と題して、澁澤龍彦が書き残した物語の考察を試みている。考察の際の基本的なコンセプトやその方法については、すでに「物語のアラベスク」（『国際関係・比較文化研究』第5巻 第1号（*1））に記したので、ここではくりかえさない。以下に掲げる考察の位置関係がわかるように、全体の目次のみを「後注」として最後に示しておいた。

（*1）静岡県立大学国際関係学部、2006年9月

『高丘親王航海記』 「儒艮」（6—A）

『高丘親王航海記』は、以下に見るように7つの章から成り立っている。個々の章はそれぞれにひとつのまとまりを持ちつつ、当然のことながら全体としての構想によって支えられている。後者の意味からすれば、章を立てて述べていくことはひとつの便宜にすぎないことを最初に断わっておきたい。

物語は唐の咸通六年、日本の貞観七年（865年）正月二十七日、高丘親王が広州から船で天竺へ向かう場面からはじまる。親王、時に67歳。従う者安展に円覚、親王の側近に持していた日本の僧である。安展は40がらみ、円覚はさらに5歳若く、唐土にあって練丹術や本草学を学んだ俊秀であると紹介される。出航を待っている船に、「頬のつやつやした、女の子みたいに手足のきゃしゃな、まだ子どもっぽい十五ばかりの少年」が飛びこんできて、「自分はひそかに主家を逃げだしてきた奴隷なので」どうか船にかくまってほしいと頼む。少年は親王によって秋丸と名づけられる。

こうして一行4人の旅のはじまるのだが、最初に、澁澤が依った資料に触れることで、まず旅の出発点を確認しておこう。『書物の宇宙誌 澁澤龍彦蔵書目録』（*1）

には「高丘親王関係」の書物十数冊が記載されている。これらについては、いずれ必要に応じて適宜言及していくが、澁澤がこの作品の基本的な設定を行うに際して用いた資料のおそらく最大のものが杉本直治郎『真如親王伝研究』(*2)であろう。親王の名称問題から年齢の問題、渡天の年次問題等、多岐にわたって詳細に考察されたこの書物の内容をゆっくりと紹介している余裕はないので、ここでは要点のみに限定して述べる。親王の入唐に関する唯一の詳しい資料は、随行者であった伊勢興房の記録『頭陀親王入唐略記』(*3)しかなく、この記録は「正月二十七日(咸通六年一引用者注)、安展円覚秋丸等を率いて、西に向かい^{おわ}了りぬ」(原文は漢文)で終わっている。杉本はこのときの親王の年齢を67歳と推定し、澁澤もそれにしたがっている。杉本はまた、安展が日本を離れるときから親王の身近に付きしたがった者であること、円覚は親王が渡唐する以前からの在唐僧で、通詞(通訳)として有能な人材であったこと、秋丸が下働きの人間で、これも日本からの随行者であること等を確認しているが、個々の年齢についてはいっさい言及していない。加えて、親王より200年前に広州を出帆した義浄(『大唐西域求法高僧伝』)が広州から仏逝(現在のインドネシア)まで20日もかからずに着いていることを前提に、彼らが広州を出発してから20日ほどで羅越(マレー半島南端)に至り、そこで親王は没したと推定している。

要するに、『高丘親王航海記』は、人物名等において歴史上の記録を一応踏襲しながら、実質的には記録の存在しない「航海」を描いたものであり、最終章(「頻伽」)の末尾に記されるように、「広州を出発してから一年にも満たない旅」を想像力によって描出したものということになる。そこで最初に確認しておきたいことは、随行者それぞれの年齢設定もそうだが、とくに円覚が「唐土にあって練丹術や本草学を学んだ俊秀」であると設定されていることがひとつ。円覚はこういう設定によって、親王のそばにあって有能な脇役の役割を果たすことになっていると同時に、通詞の役割は「みずからポリグロット(多言語話者一引用者注)をもって任じている安展」が分擔することになる。ただし、安展や円覚の役割はそれ以上のものとしては描かれていない。ふたつめは、すでにお気づきと思うが、秋丸の登場のしかたがまるで違うことだ(*4)。細かな考察は後に行うが、秋丸は作品全体の構想にとってきわめて重要な役割を振られていることだけは記しておきたい。

一行を乗せた船が広州を出発して大海原を航海する様子をしばらく記述した後、筆はいったん幼少期の親王と藤原薬子との係わりに触れた後、親王の生涯が簡略に語られていく。薬子との係わりにはふたつの要素が付与される。ひとつは「天竺」ということばに親王が味わった陶醉について、もうひとつは、薬子自身の「未生の卵」についてだ。

「親王がはじめて天竺ということばを耳にして、総身のしびれるような陶醉を味わったのは、まだほんの七つか八つのころだった。天竺、この媚薬のようなことばを夜ごとに親王の耳に吹きこんだのは、ほかでもない、親王の父平城帝の寵姫であった藤原

菓子である」。

菓子はこんなふうに語る。「そう、お釈迦さまのお生まれになった国よ。天竺にはね、わたしたちの見たこともないような鳥けものが野山を跳ねまわり、めずらしい草木や花が庭をいろどっているのよ。そして空には天人が飛んでいるのよ。そればかりではないわ。天竺では、なにもかもがわたしたちの世界とは正反対なの。わたしたちの昼は天竺の夜。わたしたちの夏は天竺の冬。わたしたちの上は天竺の下。わたしたちの男は天竺の女。……」

こうして親王の生涯を貫いた仏教への帰依は、純粋なエグゾティズムとして取りだされる。「親王にとっての仏教は、(中略) その内部まで金無垢のようにぎっしりとつまったエグゾティズムのかたまりだった。たまねぎのように、むいてもむいても切りがないエグゾティズム。その中心に天竺の核があるという構造」。

ある夜の寝物語に菓子は親王にこう語る。「わたしはかならずしも死ぬことを怖れてはいないので。三界四生を輪廻して、わたし、次に生れてくるときは、もう人間は飽きたから、ぜひとも卵生したいと思っているのです」。そうして御厨子棚から光るものを暗い庭にほうり投げ、「あれがここから天竺まで飛んでいって、森の中で五十年ばかり月の光にあたためられると、その中からわたしが鳥になって生れてくるのです」という。「儒艮」の章は、親王が50年後にこの卵に出会うところまでが記されるのだが、そこへいく前に、渡天までの親王の生涯について、最低限のことを確認しておこう (*5)。

桓武天皇薨去後、第51代平城天皇が即位。即位後3年にして平城帝は位を弟の嵯峨天皇に譲る。そのとき嵯峨帝は平城の子高丘親王を皇太子とするが、翌年に菓子の乱が起こって、親王は皇太子を廃せられる。菓子の乱とは、桓武の信任厚かった藤原種継むすめの女菓子がさきに藤原綱主に嫁して生んだ女を、東宮(後の平城帝)の女官として奉仕させるに及び、その縁故で自身もまた東宮宣旨の職をえて東宮に接近するうち、その寵愛をえることになる。桓武の命で菓子は宮中の出入りを禁じられるが、桓武の死後、女官の長たる尚侍として復帰する。平城帝の寵を好み、兄の仲成とともに政事に容喙。嵯峨天皇に譲位後も平城(奈良)の旧都に宮殿を造営して上皇を遷せしめ、重祚を画策する。嵯峨帝は菓子の官位を奪い、仲成を誅した。上皇は兵を率いて東国に拠らんとするも、天皇の軍が前途をふさいだので、上皇は平城宮に引き返して薙髪、菓子は毒をあおいで自殺。ときに親王12歳。後、24歳で出家し、東大寺に入る。空海を導師として両部灌頂を受け、上人の高弟のひとりに名をつらねる。空海入定の際にも高野山奥の院まで遺骸に付き添う。ときに37歳。57歳のとき、東大寺の大仏の頭が地に落ち、修理東大寺大仏司検校の役につき、7年をかけて修造工事を完成。大仏開眼の大法会を催す。その直後、諸国行脚の許可を願い出るも、まもなく再度上表して今度は入唐の勅許を奏請する。大法会から5ヵ月後、難波津から船で大宰府の鴻臚館に到着。親王ときに63歳。翌年、新造の船に乗りこんで唐に渡る。総勢60人。明州に

上陸。やがて洛陽を経て長安に至り、懿宗帝^{いそう}に謁見。その後、皇帝に渡天の申し出を行う。許可されて長安から陸路広州までを踏破し、広州から天竺をめざして船出する。

場面はもういちど南海を航行する船の上の親王一行にもどる。風の退屈に親王が唐土で求めた笛を吹くと、海上に儒艮があらわれる。甲板に引きあげ、秋丸が世話をすることを申し出て、飼うことが許される。秋丸は儒艮にことばを教えこみ、やがて、儒艮は片言だがしゃべるようになる。風が暴風に変り、船はある海岸に流れ着く。占城^{ちゃんば}（現在のベトナム付近）という土地らしい。上陸すると妙な人間たちがいて、秋丸を見ると横抱きにして駆けだす。この間、いろいろ珍事が起こるが、秋丸に関しては後にまとめて考察するのでいまは省いておきたい。とにかく秋丸を奪還して森のなかを進むが極端に蒸し暑く、儒艮が力尽きて死んでしまう。死ぬ前に儒艮が、「おれはことばといっしょに死ぬよ。たとえいのち尽きるとも、儒艮の魂気がこのまま絶えるということはない。いずれ近き将来、南の海でふたたびお目にかかろう」と謎のようなことばを残す。儒艮を葬って供養のために親王が笛を吹くと、異様なかたちをした生きものが飛びだしてくる。昼寝を起こされた大蟻食いがわめいている。円覚が、大蟻食いはいまから六百年後にコロンブスが新大陸で発見するのだから、ここにいるのはおかしいという、大蟻食いは、おれたち一類の発祥した新大陸はここからちょうど地球の裏側にあたる、つまりおれたちは新大陸のアンチポデスなのだと反論する。

やがて大蟻食いは一行を巨大な蟻塚に案内する。その蟻塚には緑色の石がはまりこんでいて、われらに伝わる伝承として、いつのことか石が海のかなたから飛んできて蟻塚にぶつかって取れない、石は翡翠で、月の明らかな夜透き通るように光って、なかに一羽の鳥がみえる。鳥はだんだん大きくなり、いずれ殻を破ってかなたの空に飛び立つだろうと大蟻食いは告げる。

次の満月の夜、親王がひそかに石のところへ行くと、石は浩々たる光を放っている。親王は不意にとっぴな考えに憑かれる。鳥が石の殻を破る前に、自分がこの石を力いっぱい日本にむけてほうり投げると、みるみる時間が逆行して、ふたたび甘美な過去の時間が目の前に再現することもあるのではないか。鳥が飛び立つのを見たいという思いよりもその誘惑のほうが強くと、親王は手をのばして石をもぎ取る。そのとたん、光は消えて石はただの石になってしまう。のちになって、一同の前で大蟻食いのことを話題にしたが、安展も円覚も秋丸もきょんとした顔をしているのを見て、親王は狐につつまれたような思いになる。

冒頭の章からすでに盛りだくさんな内容なので、整理しておこう。

親王の旅の中心に「天竺」があり、それは親王のエグゾティズムの源泉であること。その「天竺」を「アンチポデス（対蹠点、地球の裏側）」のイメージをくりかえすことで描こうとしていること。また、天竺へのエグゾティズムを親王に与えたのが藤原薬子であり、薬子を異能の持ち主として描いて自身の未来の転生を予告させ、石（玉）を投げて50年後の再会を設定するが、親王の気まぐれ（？）によって未遂に終わって

しまうこと。この最後の大蟻食いの登場する場面が夢（この場合は白昼夢）として描かれること（*6）。あえて菓子との係わりを技法としていえば、日本から天竺へむけて玉を投げる行為と、蟻塚から日本へむけて玉を投げ返す行為とが対比的に描かれる（後者は未遂に終わっているが）。この対比は、最終章において変奏的に反復される（後に触れる）。予告として記しておく、菓子はここで鳥に転生しないことによって、後の親王の旅に深い影響力を発揮していくことになる。その他、謎のようなことばを残して死んでいった儒艮の存在、秋丸とはいったいだれなのか、これらのことはいずれ触れるべき場所で述べることにしよう。

（*1）国書刊行会、2006・10、P. 282

（*2）吉川弘文館、1965・7。高丘親王と真如親王とはもちろん同一人物。後の「頭陀親王」も含めて他にもさまざまな呼び名があることは、澁澤も作品の本文で触れているし、杉本はより詳細に述べているが、ここでは立ち入らない。

（*3）『大日本仏教全書』「遊方伝」（第一書房、1979年）所収。澁澤もこの記録については本文で言及している。

（*4）より正確には、親王が「秋丸」と命名するに際してこう話している。「おまえは秋丸という名を名のるがよい。つい先年まで、わたしの身の世話をしてくれる役目の丈部秋丸^{はせつかべ}というものがいたが、このもの、長安で疫病^{えやみ}を病んであえなくなった。おまえは秋丸の二世になったつもりで、わたしに仕えてくれ」。

（*5）以下の記述は、澁澤の本文および『真如親王伝研究』（主に602～603頁）に依っている。

（*6）中心に夢あるいは夢とも現ともつかない状態がくる構造は、「犬狼都市」（初出は1960・4）などに典型的に見られる。ここでは、夢とダイヤモンドという結晶体との巧みな融合をとおして、主人公にとっての「確かな現実」が発見される。つまり、「夢」は「現実」とは異なるあいまいさとして表現されるのではなく、「確かな現実」として表現されるという転倒を抱えていることを注意しておきたい。「犬狼都市」に比べれば、『高丘親王』ははるかに若さや硬質さから遠く柔軟に成熟した表現になっているのだが。ここで「夢」に言及した意図は、次章以降に見られるとおり、親王の肝要な体験が「夢」として描かれるからだ。いわば、本質は夢の構図をとおしてあらわれるという基本の構造。

「蘭房」（6－B）

「儒艮」の章の注で触れておいたように、この章はほぼ全体が夢の構図で成り立っている。少しあらすじを追いかけてみる。

親王一行を乗せた船はすでに真臘（カンボジャ）に到着し、メコン河を遡ってトンレサップ湖に来ている（*1）。船は水と物資の補給のためにある中州で仮泊すること

になり、親王が秋丸をつれて岸辺で魚を釣っていると、儀式ばった派手派手しい服装をした唐人が、小舟に乗ってやってくる。その唐人が、これからジャバルマン一世の後宮に行くところだが、めったに行けるわけではないので、ぜひ連れて行ってやろうという。……章の最後の部分からひっくり返して眺めてみる。最後はこうなっている。

「ジャバルマン一世の統治は西暦六五七年から六八一年まで二十五年近くにおよんでいるという。そうとすれば、この王は高丘親王の天竺行よりも二百年ばかり前に生きていたということになる。唐人張伯容のいうように、たまたま親王が真臘にあったとき、この王が八十回目の誕生日を迎えたなどということとはありえない。どこでどう間違ったのか、あきらかに張伯容はアナクロニズムを犯しているとしか考えられぬだろう」。

もちろん張伯容がアナクロニズムを犯しているわけではなく、親王自身がある非現実の異様な体験をしていることを作者が記しているのだが、かりにその非現実な体験を「夢」と等価なものと考えた場合（唐人の出現以降を親王の「夢」として読んでなんら支障はないというほどの意味だが）、この章の夢にはきわだった特徴がひとつある。唐人の舟に乗って後宮に向かう途中、親王は夢を見る。

……夢のなかでも親王は舟に乗っている。薬子と一緒にである。親王は夢のなかで七つか八つの子どもにかえっている気配。琵琶湖の竹生島に行くのだが、女人禁制なので、薬子は長い髪を少年のように束ね、男の子のようなかっこうをしている。やがて舟は竹生島に着いて、二人は石段を登り、一基の三重塔に入っていく。四方の壁には浄土変相図があって、阿弥陀や諸菩薩の絵とともに上空に豊満なからだをした女（からだは鳥）が描かれている。親王はそれに眼を奪われて、これはなにかと問うと、薬子は「迦陵頻伽」だと答える。外へ出るとすでに夜で、暗夜を黄金の鳥が飛んでいるのを見る。迦陵頻伽だと親王は思う。よく見ようと断崖の下をのぞこうとすると、「あぶないわ。みこ、みこ」と呼ぶ声がする。

目覚めるとそばに秋丸がいる、という風に進んでいくのだが、夢の途中にこういう記述が挿まれる。「たしか七つか八つのころ、親王は舟で琵琶湖の竹生島に詣でたことがあったが、そのときは父といっしょで、薬子はいなかったはずだ。……」つまり、この夢が現実の「記憶」と結びついていないことが作者によって断られる。それでは、親王はなにを源泉としてこの夢を見ているのか。これに関連する記述が、この夢の別の個所にもある。

「竹生島は、島をぐるりと取り巻く断崖の上に帽子でもかぶったように、緑の樹々がこんもりと盛りあがって見える。前に一度、これとそっくりなかたちの島をどこかで見たことがあるような気がしたが、それがどこだったかを親王はどうしても思い出せなかった。いや、思い出せないのも道理で、まだ八つになるやならぬ親王には、琵琶湖に浮かぶ大小いくつもの島よりほかに、それまでどんな島を見たという経験も

なかった。見たことがないものを、どうして思い出すことができようか」。

「みこ、みこ……島につきました」と声をかけられた親王は、夢から目覚める。「めざめたたん、いま見たばかりの夢の中で、竹生島にそっくりな形の島をどこかで見たような気がしたのは、この島のことだったのかと親王は思いあたった。ただ、七つか八つのころの自分を再現した夢に、六十歳をすぎた自分の、しかもごく最近の経験が出てこようとは、いかにもふしぎとしかいいようがなかった」。「最近の経験」が夢に出るのは不思議でもなんでもないというしかないが、ここにあるのは、実に奇妙な経験だ。島を見る前にその島を思い出すという時間錯誤の経験、しかし、もっと奇妙なのは、「最近の経験」といっている経験そのものが、すでに見たように時間錯誤の非現実な夢のなかに存在しているという事態。これはいったいどういうことか。

結論を先に記せば、ここで生じているのは、親王にとっての本質が「夢」の構図をとおしてプラトンの的にあらわれでているという事態なのだ。プラトンの「想起説」と濫澤の思考との係わりについては「蜃気楼」(3-F)で述べたので、ここでは詳しくは触れないが、概略のみくりかえせば、ピュタゴラス派の影響を受けたプラトンは、魂の不死(輪廻転生)という考えを前提に「想起説」を唱える。不死なる魂はいったん他界へ立ち去るが、再び生まれるときには知識は忘れ去られている。学ぶとは、その忘れていたものを「想起」することにほかならない。秦の徐福はまさにその「想起」とおして蓬莱山を発見する。「私は前から蓬莱山を知っていたのですよ。(中略)おそらく生まれる前から、私の頭のなかに刻みつけられていたのでしょうな。それがかたちになって外の世界に現れるのを、私はただ待っていたにすぎませぬ。およそ発見するとはそういうことです」。徐福は蓬莱山を「一つの本質」だという。「一つの本質が海上に現れたのです。べつの場所にだって現れますよ。本質は遍在していますから」と。

それでは、親王にとっての本質とはなんだろう。それはまず、唐人の語りをとおしてジャヤヴァルマン一世の後宮に住む「陳家蘭」としてあらわれ、次に、薬子の登場する夢において「迦陵頻伽」の姿であられる。唐人は親王になにを語ったか。夢のつづきを追いかけてみよう。

小舟のなかで唐人は語る。真臘国を初めて統一したジャヤヴァルマン一世の八十回目の誕生日に、偉大な王の後宮が一般民衆のために開放される。王は若年より荒淫で、世のつねの女には満足できなくなり、珍奇をもとめて四隣の国々へ使者をつかわした。以下、本文を引く。「驃^{ビョー}(現在のミャンマー、引用者注)から雲南にかけての山嶽地方、すなわち今日、南紹という国が威勢をふるっている峻険の地方に、まれに単孔の女を出生せしめる種族が住んでいるといいますが、王はこの世にもめずらしい単孔の女をもとめたのです。(中略)王のつかわした役人は雲南の奥ふかくに分け入って、秘境^{ミョウキョウ}というべき羅羅人の住む山間の集落をさがしまわったあげく、十年がかりでたった数人の、単孔の女をようやく見つけ出すことができたそうです。女たちは島の後宮

に閉じこめられ、陳家蘭と呼ばれて王の愛玩を受けました。けだし、蘭のような珍種の意でしょう。わたしとしてはむしろ、鳥に近い女だと思うのですがね」。

久しく眷恋の対象であった陳家蘭を唐人はこれから訪ねていこうとしているわけだ。この話を聞いた直後、親王はすでに紹介した夢を見る。「迦陵頻伽」について葉子は親王に語る。「天竺の極楽国にいる鳥よ。まだ卵の中にいるうちから好い声で鳴くんですって。顔は女で、からだは鳥」と。色あざやかなその画を見て親王は、顔が「葉子に似ている」という。おまけに、夢の覚えぎわを、作者はこんなふうに記す。

「あぶないわ。みこ、みこ……」

葉子の声をうしろに聞いたように思った。あるいは、葉子の声ではないような気もした」。

実は、「迦陵頻伽」を中心として葉子や秋丸の存在がそこに重ねられていく、あるいは、「迦陵頻伽」という本質がさまざまに遍在するといひ換えてもいい事態がやがて進行していくわけだが、ここではまだそれは予兆あるいは暗示の段階にとどまっている。予兆ということでは、陳家蘭の故郷である雲南の南詔国というトポスが、物語の進行につれてより強く表に浮上してくる。「天竺」というトポスの中心に「迦陵頻伽」を据えることによって、別のトポスがやがて親王を引きつけていくことになる。

秋丸の存在について、まだここでは詳述できない。とりあえず、親王が蘭房（陳家蘭の房室）で目撃した光景を確認しておこう。

ある事情でひとり後宮に入ることになった親王は、折れ曲がった回廊を案内されて、最後に行きどまりの部屋にやってくる。その部屋は八角形で、それぞれの面が扉になっていて、その向こうに蘭房があるらしい。最初の扉を開けると、全裸の女がいるが、下半身が人間ではなく、茶色の羽毛の密生している鳥だった。おまけに、女のからだは死んだように動かない。次の扉を開けると、まったく同じ光景で、羽毛の色だけが違う。……親王は疲れが出て、部屋の中央にある椅子で眠りこみたいと思ったが、勇を鼓して立ち上がり、出口へ向かう。……

後宮は植物が繁茂し、建物には亀裂がはしり、内部に入ると天井も壁も蜘蛛の巣だらけで、床には塵が厚くつもっている。不思議な空間だというしかない。「アナクロニズム」と作者は記す。しかし、親王は二百年前の王の後宮を歩いているわけではない。陳家蘭の姿に象徴されるように、親王は二百年前に時間が停止してしまった非在の空間を歩いているのだ。

(＊1) 冒頭は、周達観の『真臘風土記』に触れるところからはじまっている。『書物の宇宙誌 澁澤龍彦蔵書目録』には『考証 真臘風土記』（三宅一郎・中村哲夫、同朋舎出版、1980・5）がある。『真臘風土記』は13世紀末に元の成宗が真臘に派遣した使節に随行した周達観が一年の滞在期間に城郭や服飾などさまざまな事柄について記録したもの。ちなみに、澁澤が引

いている「ことごとく沙をもって浅し。……」という文章は、本文「総序」の冒頭にある。

「獏園」(6-C)

獏が登場するこの章は、いちだんと夢づくしの観を呈している。構図として見ても、「蘭房」の章と対の関係をもちながら変奏されている。基本的に全体が「夢」でその夢のなかに夢を内包するという入れ子の構造、入れ子の夢に登場するのはやはり菓子であるが、夢自体は変奏され、同時に全体の夢も「蘭房」における「過去」がここでは「未来」へと変奏される。しばらくは物語を順を追って眺めてみる。

親王一行は盤盤(マライ半島中部)に来ている。相変わらず暑苦しい気候のなかを、方角もわからずマライ半島の密林のなかを歩いている。不思議な植物を目にし、本草学に詳しい円覚が説明を試みたりしているが、秋丸が妙なものを見つけ、これは何だろうと考えるがわからない。ただ、その丸いものは、いい薫りといやな匂いと、ものによっては両方する場合がある。やがて密林がつき、谷に臨んで集落がある。安展と円覚が、先にようすを見てくることになり出かける。(先どりしていうと、ここから先が親王の夢になる)。そこへ、妙な動物があらわれ、糞をする。それを見て、さきほど見て植物と勘違いしたものが、その動物の糞であることがわかる。土民があらわれてその動物をつかまえる。そして、その後、親王と秋丸を縄で縛って自分たちの集落に連行し、親王と秋丸は、穴のようなところへ入れられる。

翌日、盤盤国の太守が親王のところへやってきて、尋問する。親王は自分が東海の島国からやってきた仏教徒で、これから天竺に行くところだと説明する。太守は天竺まで行かなくてもここはすでに仏教の盛んな国であるといい、ところでおまえは夢をよく見るかと、妙なことを問う。親王は、幼時から夢を見ることにかけては堪能であったと答える。わるい夢は見ず、ほとんどいい夢ばかり見るという、太守はおおいに気に入る、それではおまえを獏園に行かせようという。

翌日、親王は、秋丸とともに霊囿(*1)に連れていかれ、そのいちばん奥にある獏園の、獏舎の内部の建物にある寝室で寝ることになる。獏園の番人の説明によると、獏は人間の夢を食って生きるのだが、この国の人間は年中頭を日光に照らされているためかいっこうに夢を見ない。そこで獏が食糧に窮して、ろくな食物がなく、彼らの糞もいやな匂いのものしかなくなってきた。太守の娘パタリヤ・パタタ姫は原因不明の憂鬱症で、さるバラモンに太守が聞いたところでは、獏の肉を食わせればいいということだ。獏がいい夢を食っていれば、肉の効能もいちじるしい。そこでおまえが選ばれていい夢を獏に食わせることになった、という具合(*2)。

親王が寝室で眠った翌日、何も夢を見なかったと番人にいうと、番人は、ちゃんと夢を見た、それもいい夢を、それが証拠に獏は今朝いい薫りの糞をしたという。夢を

食われて、親王は夢を見たことを忘れてしまっていたのだ。いく夜かが過ぎたとき、親王の心がしだいに鬱屈してくる。夢を見ても、それが猯に食われてしまって跡に何も残らないということが、これほど憂悶をもたらすものかと親王は思う。十数日が過ぎた夜、親王は初めて悪夢を見る。

……奈良の仙洞御所の寝殿に父が病氣らしく衾をかけて横になっている。そばに葉子がいて生薬を作っている。親王は十歳くらいで、廂のほうから母屋の奥をのぞいているのだった。なぜか、見てはいけないものを見ているような気がする。葉子はしきりに父に薬を飲むよう勧める。父の平城帝はいやがって飲もうとしない。そのとき、葉子がふいに後ろを振り向く。葉子の目が残忍な光をたたえているのを親王は見たように思う。「お父さまを殺してはいやだ」と親王がいうと、葉子はわざと聞きちがえて、「お父さまを殺してくれですって、なんということをみこはおっしゃるのです」と陰険な笑いを浮かべていう（*3）。

二三日して、太守の娘パタリア・パタタ姫が猯園を見にくることを番人が伝える。三匹いた猯がすでに一匹に減っている。猯園にあらわれた姫を見て、十五歳ほどの少女ながら、顔立ちが葉子にそっくりなので親王は驚く。先夜夢に見た葉子の残忍さが拡大されてその姫に再現されているように思う。少女は物慣れたようすで、柵のくぐり戸を開けると、猯園に入り、猯の毛並みをなでている。すると、雄の猯はしだいに興奮してきて、発情の徴候をあらわし、男性の象徴を勃起させる。少女はそれを口にふくみ、残忍の表情をちらとあらわす。親王は、この光景を目で追いながら、自分が猯になったような気がしてきて、愛撫をうけているのが自分だという気がしてくる。「考えてみると、自分の夢を猯が食い、その猯の肉を少女が食っていたのだから、猯を媒介として、少女と自分とは直接につながっており、少女は自分の夢によって生きているのだといえはいえないこともない気がした。自分が夢を見なければ、この少女の存在もありえないのではないかという気さえた」。やがて、猯が絶頂に近づき、あっけなく達する。目の前のイメージは一瞬に消えうせ、親王は夢ともうつつともつかぬ世界にころがり落ちる。

「みこ、おめざめください。安展さまと円覚さまが吉報をもってもどられました。盤盤国では、みこをお迎えする用意をしているとのことです」。耳もとで秋丸の声が聞こえる。親王はかすかに笑いながら答える。「盤盤国か。それなら、いまそこへ行ってきたところだよ」。

夢を介して葉子の別の側面「残忍さ」があらわれてくる。つづいて葉子はパタリア・パタタ姫という十五歳の少女に転移する（*4）。親王がめざめる前の状態とは、文字どおり「夢」を介して親王と猯とパタタ姫とが互いに区別できない形で一体化していく状態であり、それは性愛の絶頂における至福として表現される（*5）。

夢づくしの中身を確認しておこう。親王の夢を食う猯、その猯の肉を食べるパタタ

姫という順序で存在する入れ子構造（猿舎が入れ子構造をしているといったところはとても見えやすい点だが）、しかし、先の引用箇所「自分が夢を見なければ、この少女の存在もありえないのではないかという気さえた」という部分は、意味が二重になっており、すでに指摘した入れ子構造を意味すると同時に、自分が夢を見ることによってはじめて少女は実在しはじめる、という「夢」と「現実」との転倒、つまり、全体の夢から見た場合の意味をも内包している。後者の意味に解したとき、入れ子の包含関係は逆転するという不思議な構造が成立しているのだ。

- (＊1) この章の最初で作者は「伝説によれば、盤盤の太守は霊園をいとなんでいたともいう。霊園ということばは『詩経』の「大雅」に出てくるが、周の文王が禽獣を放し飼いにしていたという一種の動物園だと思えばよいだろう」と記している。
- (＊2) 番人の説明のなかにこうある。「猿園ができたのは、いまの太守より六代前の太守の時代だったが、そのころ盤盤国も版図がひろく、国威も隆盛をきわめていて、飼われている猿を養っていくだけの夢を供給するのも易々たるものだった。夢をよく見る北方の羅羅人がぞくぞく盤盤国へながれこんできて、もっぱら猿園の猿に夢を供給するための任にあたっていた」。その後の版図の縮小によって猿園の維持がむずかしくなったというのだ。ここでも「蘭房」の章同様雲南の羅羅人が登場する。いや、これからなんども登場することになるのだが、この点については、後にまとめて考察する。
- (＊3) 葉子が扇をとって舞う場面があり、そこで葉子がこう歌う。「三輪の殿の／神の戸を／おしひらかすもよ／いく久いく久」（歌意は、「三輪の大神が社殿の戸をいっぱいにかかれた。末長く、末長く」）。この歌は上田秋成『春雨物語』の「血かたびら」に出る。「血かたびら」は、桓武の御子である平城帝の「善柔（善良で柔和）」な性格が一連の悲劇を生んでいくという形で、以下に続く歴史的イベントが描かれていく物語だが、この物語とこの章との関係についてここでは立ち入らない。
- (＊4) 澁澤は葉子のイメージを「残忍な（目の）光」に象徴させ、パタリヤ・パタタ姫にそれを重ねている。この転移は物語の終わりまでつづくのだが、ここには、澁澤の物語に共通してあらわれる女性像である「ファム・ファタル（宿命の女）」——19世紀ロマン主義の時代にひんばんにあらわれる女性像だとマリオ・ブラーツ（『肉体と死と悪魔』）が指摘したそれ——のイメージがつきまとっているように思われる。
- (＊5) この一体化は実は親王の思い違いだったことが「頻伽」（最終章）で示される。パタタ姫もまた遍在する本質のひとつだとすれば、澁澤が描く物語とは主人公がついに本質と一体化できない物語なのだ（詳しくは後述）。

(後注)

I キー・ワード (物語要素) ——

- 1 迷宮、2 鏡、3 天使、4 鉱物、5 鳥、6 船、7 怪物、8 城、9 花、
10 球体、11 裸婦、12 人形、13 両性具有、14 天竺、15 時間、16 悪魔、17円環、
18 仮面、19 狐、20 首、21 箱、22 分身、23 変身、24 夢、25 逆宇宙

II 作品解説 (物語分析) ——

- 1 『エピクロスの肋骨』…… 1—A「撲滅の賦」、1—B「エピクロスの肋骨」
2 『犬狼都市』…… 2—A「犬狼都市」、2—B「陽物神譚」、2—C「マドンナの真珠」
3 『唐草物語』…… 3—A「空飛ぶ大納言」、3—B「女体消滅」、3—C「三つの髑髏」、
3—D「金色堂異聞」、3—E「六道の辻」、3—F「蜃気楼」、
3—G「避雷針屋」
4 『ねむり姫』…… 4—A「ねむり姫」、4—B「狐媚記」、4—C「ぼろんじ」、
4—D「夢ちがえ」、4—E「画美人」、4—F「きらら姫」
5 『うつろ舟』…… 5—A「護法」、5—B「魚鱗記」、5—C「花妖記」、5—D「髑髏盃」、
5—E「菊燈台」、5—F「髪切り」、5—G「うつろ舟」、
5—H「ダイダロス」
6 『高丘親王航海記』…… 6—A「儒艮」、6—B「蘭房」、6—C「猯園」、6—D「蜜人」、
6—E「鏡湖」、6—F「真珠」、6—G「頻伽」

III 関連作品 (物語群) ——

- 1 『悪徳の栄え』(サド)、2 『さかしま』(ユイスマンス)、3 『大理石』(マンディアルグ)、4
『オルフェ』(コクトオ)、5 『長靴をはいた猫』(ペロー)、6 『博物誌』(プリニウス)、7 『放浪
者メルモス』(マチューリン)、8 『列子』、9 『夢』(ジャン・パウル)、10 『阿片吸引者の告白』
(ド・クインシー)、11 『オーレリア』(ネルバル)、12 『砂男』または『ファルーンの鉱山』(ホフ
マン)、13 『続本朝往生伝』(大江匡房)、14 『エレホン』(S・バトラー)、15 『未来のイヴ』(リ
ラダン)、16 『仮面物語』(ジャン・ロラン)、17 『眼球譚』(バタイユ)、18 『変身譜』(オウィディ
ウス)、19 『アレフ』(ボルヘス)、20 『死都ブルージュ』(ロデンバック)、21 『千夜一夜物語』、22
『マルドロールの歌』(ロートレアモン)、23 『奥州波奈志』(只野真葛)、24 『特性のない男』(ム
ジール)、25 『審判』(カフカ)、26 『日月両世界旅行記』(シラノ・ド・ベルジュラック)、27 『モ
ロー博士の島』(H・G・ウェルズ)、28 『類推の山』(ドーマル)、29 『フランケンシュタイン』
(シェリー夫人)、30 『本当の話』(ルキアノス)、31 『列仙伝』、32 『聖アントワヌの誘惑』(フ
ローベール)、33 『超男性』(アルフレッド・ジャリ)、34 『真如親王伝』、35 『夜窓鬼談』(石川鴻
斎)、36 『明恵上人伝』、37 『マルコ・ポーロの见えない都市』(イタロ・カルヴィーノ)、38 『玉
虫物語』